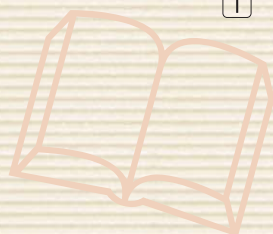


探検！言葉の森①

京都教育大学教授

森山 卓郎
もりやま たくろう



心の橋を 他人^{ひと}事^{こと}に？

年度が新しくなる四月。三月から四月というちょっとした違いなのに、社会生活のうえでは大きな区切れができる。幼稚園・保育園の「年長児」は「小学生」へ、「小学六年生」は「中学生」へ、そして、「中学三年生」は「高校生」や「社会人」へ。それぞれ新しい「〇〇生」や「社会人」へとなっていく。行き着く先の「社会人」というものも、昨今のいわゆるニート問題などを考えると単純ではないのだが。

さて、その区切りの歌といえば、やはり「蛍の光」だ。最近はいろいろなお店の閉店時間の「音楽的記号」にもなっているが、やはり、これは「卒業」の歌だ。

思い返すと、小学校卒業のとき、「蛍の光窓の雪 ふみ読む月日重ねつつ いっしか年もすぎのとを あけてぞ今朝は別れゆく」という歌詞の、「すぎのとを」がよくわからなかった覚えがある。

しかし、中学校を卒業するとき、「年も過ぎ、…明けて」に「杉の戸を開けて」という言葉が重ねられていることがわかるようになった。三年間の学習の成果を込めて歌ったはずだ（歌い方がどう変わったかは知らない）。ただ、続く二番はそれでもよくわからなかった。「とまるもゆくもかぎりとして かたみにおもうちよろずのこころのはしをひとことに さきくとばかりうたうなり」。うーむ、なんのこっちゃ。「とまるもゆくもかぎりとして」って、留年の年限？ 「かたみに思う」は「形見に思う」？ 「こころのはしをひとことに」は「心の橋を他人事に」？ 「先くとばかり」？ 「はばかり」と違うんか？

ま、「蛍の光」の意味がわからなくても、声さえ出せば卒業式はつつがなく終わる。ただ、いろいろな人にこっそり「蛍の光」の歌詞のことを聞くと、よくわからなかったと告白してくれる人は意外に多いのであります。

しかし、改めてこの二番の歌詞の意味を考えてみると、これがなかなかいい。「とどまる人も行く人も、もう「これ限り」という別れの場面のハイライト。過去してきた日々の「こま」「こまが去来する。「かたみに（＝片身に＝お互いに）思う千万の心のはし（＝万感の思い）」。そのとても言葉にならぬ思いを、たった一言に込め、「さきく＝お幸せに」とだけ歌うのである。一言の「幸く」に込められた深い思い。そして、未来への祈り。この歌詞に関する限り、閉店時間にしづとい客を追い出すために鳴らす曲ではない。

そして、新学期。万感を込めて別れた卒業式の思いを胸に、きらきら輝く未来へと歩みだした卒業生たち。今ごろどうしているだろう。

